

# 中山間地農業における木頭ゆずの担い手育成、ブランド向上支援

## ねらい

木頭ゆずは那賀町の最も基幹的な品目で、売上は青果・加工原料合わせて約3億円に及び、山間地における貴重な収入源になっている。

しかし、平成30年度に那賀町のゆず栽培農家調査では、作業者の67%が60～70歳代、24%が80歳代以上と高齢化が進んでおり、労働力も1名のみが21%、2名だけが53%と、小規模経営であることが示されている。

ゆずには古代から日本の食文化を形作ってきた伝統があり、旧木頭村は昭和30年代から、全国に先駆けて技術開発・組織化・加工商品開発等に取り組み、近代化とブランド確立を成し遂げてきた実績ある産地である。

そこで、産地の維持・発展のため、担い手の確保、木頭ゆずブランドをさらに向上させる活動に取り組んだ。

## 活動地域・対象

活動地域：那賀町

対 象：新規参入者により構成された組織「チーム木頭ゆず」

## 普及活動の目標

地域資源を活用した魅力ある地域農業の展開  
産地を支える人材の育成支援

## 目標に向けた活動概要

令和2～4年度の活動

令和2年 9月接ぎ木講習会

令和3年 1月高知県北川村先進地調査研修，2月剪定技術講習会，3～8月農薬ドローン散布展示ほ設置

令和4年 2月高知県香美市物部先進地調査研修(コロナ禍により中止)，同月剪定技術講習会，3月開花期前後の管理技術モバイル講習会，8月優良系統調査・検討会，9月フィンガーライム栽培検討

令和5年(以下、予定) 1月愛媛県鬼北町先進地調査研修，2月剪定技術講習会，3月開花期前後の管理技術モバイル講習会



剪定・肥培管理講習会



モバイル講習会(講師側)

## 普及活動の成果

### ○ チーム木頭ゆず会員数（人）

年 度	平成30年度	令和1年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
会員数	13	14	15	18	19
うち新規会員	1	1	2	3	1

産地全体では深刻な担い手不足に悩まされているが、毎年新たな農業参入者を受け入れている。

- 現地講習会では産地の成り立ちにも詳しいベテラン技術者の指導が好評を博した。
- 農業支援センターから木頭までは片道約80km、2時間近い遠距離にある。そこで、タブレット等のモバイル機器を導入し、モバイル講習会を実施することで、回数増加と効率化を図った。

## 今後の発展方向

木頭ゆずは、貴重な山間地農業の核として、今後も伝統継承・情報発信を通じたブランドの維持・拡大を図る必要がある。

- ゆずの古代から続く食文化としての伝統、旧木頭村からの産地化の軌跡について、木頭果樹研究会のまとめた冊子「ユズロードを求めて」がある。この内容を読みやすくまとめた簡易版パンフレットを作成し、配布する。
- モバイル機器を導入、講習会を開催したので、今後は回数を増やし、適時に講習できるようにする。

## 関係者からの声

- ・チームリーダー及び会員：他人の園地を見る機会がないので、大変参考になった。他産地も見に行きたい。
- ・チームの事務局をしている役場担当者：若い人が集まって勉強することで生産意欲が高まった。

## 阿南農業支援センター

連絡先：徳島県阿南市富岡町あ王谷46 tel：0884-24-4182